

モートン 皆さん、こんにちは。

会場 こんにちは。

モートン モートン常慈です、***。よく響きます。遠いですね。あんまりちょっとこの辺とりあえず(?)、司会のほうがいいです。まあ、挨拶ぐらい。一応カナダ出身で、初来日が昭和 63 年に来ます(?)。もうほぼ 30 年になります***、で、四国遍路の研究が 20 年になります。それで、6 年、7 年前ぐらいに日本国籍を取得して、名前を、もともとのニックネームがジョージなんですけど、それの当て字を、常に慈しむを自分で考えて、それが今の名前になっています。これから、もしかして初めて外国人の出身の人が遍路について講演するかもしれないけど、私は主には歴史家なので、今から 200 年前の話だったりについて話したいと思います。ちょっと遠くなりますけど(笑)。

会場 (笑)

モートン で、後ろ見えますか。

男性? できます(?)。

モートン で、こっち行ったり、こっち行ったりしますので、私は、古い絵はがきを集めるのが好きなんですけど、この絵はがき、どれも気に入って、四国遍路ではないと思うんですけど、まあ、100 年前の 1 人の巡礼者で、その当時の服装とか、***して、彼女がどういう思いで旅をするのだろうと、僕のお気に入りの写真です。で、こっちのほうが、2、3 年前、徳島県が作った 3 分間の遍路の PR ビデオ。で、それが去年、JAL の国際線で放映しまして、まあ、そういう、それが僕です。で、今日は、大体 1917 年から 37 年間の 20 年間ぐらいの期間について話したいと思います。で、その 20 年間の***は、もう当時の外国人遍路とか、外国人の目から見た四国遍路の話とか、お遍路さんや寺院についてのストーリー、そのデンケン(?)。また、その当時の四国内外(?)の四国遍路の PR について話したいと思います。で、どうしてその期間を決めたかっていうと、1917 年、大正 6 年に、初めての外国人が四国遍路に出た。で、その頃から、ほかの外国人も行ったし、まあ、大体それがスタート。また、37 年に大阪のほうで出開帳が開催されて、約 20 万人の人が来たので、この 20 年間は、本当にさまざまなガイドブックが出版されたり、今、この時代で見られない風習があったから決めました。で、本題に入る前に、ちょっとこの大阪の話をしたんですけど、37 年に、5 月 5 日から 6 月 17 日の 43 日間、関西のほうでは出開帳をやりまして、で、つい最近、そのチラシを入手しまして、このようなチラシを皆さんに配って。この辺に大阪、梅田、神戸、高野山があって、和歌山があって、その間にあるところに行ったら四国遍路と同じようなことができました。で、今日の主な講演の目的は、四国遍路の様子を見た外国人、また、四国遍路をした外国人の感想を知ってほしいです。四国遍路に関する、知られていない、忘れられてる不思議なストーリーを知ってほしいです。そういうストーリーは、昔どういう役割を果たしたのかを考えてほしい。3 番(?)、四国遍路の興味深い歴史文化を知ってほしいです。100 年前の遍路と、一つの例として、大体 100 年前のお母さんと 2 人の娘が遍路で歩きました。で、昔の人はどういう動機で出たのか(行ったのか?)、今からちょっと考えてほしいです。もう一つ、200 年前の写真は、あるお父さんと息子が歩いている。また、あるホテルの前でグループが、

こういう写真を撮るためにどのぐらい立ってたんでしょうね。今なら、ぱちって1秒、昔は、はい、OK、大体何十秒かかったと思いますけど、とつても。まあ、その当時の服装とか使ったものをよくわかります。白を着てる人は1人、あと黒ばっかり。もう一つの写真、4人の女性が歩いてる。で、とてもユニークな珍しい絵はがき、室戸岬に御蔵洞あるんですけど、それを、出てるお遍路さんの写真、絵はがきを見つけて、これです。全部100年前ぐらいの様子です。で、不思議なことに、100年前の絵はがきに英語も書いてあります。で、昔のお遍路さんは、今みたいにマウンテンブーツとかはなくて、昔はわらじ履いてたんですけど、そのわらじをどうやって手に入りましたか。ある情報源として、1825年の本にちょっとヒントがあります。そこに、地元の人がわらじを作って、ここに掛けて、ここに竹のもの、そこに五つの丸があるんですけど、そこに5銭、まあ、自動販売機みたいに5銭入れてわらじを取って回った。で、もし、おなかがすいたら、ここにだんごがあって、だんごが2銭というシステムやりました。これが200年前ぐらいで、1927年、100年ぐらいたっても同じような無人わらじ販売。ここにもまた竹の***があって、そこにお金入れてわらじを取って回った。この2人のお遍路さんは何と北海道から来た。で、わらじ履いてお遍路に行ってたんですけど、とつても重要なのはガイドブック。200年前でもたかさんのガイドブックが出版されて、ここに1番札所、霊山寺が写っています。で、ほかの写真見ていきますけど、この本堂とか大師堂の写真、今はあるんですけど昔はない。気がついてますか。今、必ず、本堂から大師堂の前に置いています。この当時はないんです。ろうそく、線香、ないです。ある？ちょっと不思議と思います。で、昔のガイドブックには、それを準備するために何日ぐらいかかるのかとか、内容、注意した***がいいのか、いろいろ書いてありました。もう一つのガイドブックにも、***の本尊、で、そこにも何日間かかるとか、自分の持ち物をちゃんと持てよとか、心得が書いてあります。で、これが1927年なんですけど、お遍路さんが使ってた納め札。願い事、県とか市とか町、今で、年、たまに。昔は年を書かなくても、年齢を書かなくてもよかった。もう一つが、1928年に、まず、第一、四国(?)のリョウコ(旅行?)が真剣であること、遍路は徒歩による旅、歩くこと。で、次に大切なのは納経帳。で、白衣の着物に***して、の人もいたり、そういう、まだいろんなアドバイスもありました。また、違う本には、そういう地図がありました。一つの地図の例で、これが1番から7番、とても面白いのは、昔、1番、2番、3番、4番、5番のすぐ近くに鉄道があったこと、今ないですけど。今よりもっと便利だったと思います。で、昔100年前といいますと、今と違って、今はお遍路さんが、今のお遍路さんのイメージと100年前のイメージは全く違って、100年飛びますと、お遍路さんではなく辺土、言葉を使ってとても恐ろしい、怖いイメージがあって、坊やがもし悪いことしたら辺土がやってきますよ、のようなイメージがありました。で、一番最初に説明したんですけど、100年前からでも外国人が四国遍路をやっています。その一つの例としては、ポルトガル人のモラエス。で、彼が16年間、徳島に住んで、奥のこの辺。いっぱいの本を、徳島とか日本について書きました。で、本人の写真と、海外で家にいる様子の写真。で、その間、紹介しますが、29年に亡くなって、彼が家があった場所、徳島駅から歩いて15分ぐらいに跡があって、それが玄関にいる写真なんですけど。彼の文献を見ますと、ちょっとだけ遍路の引用があります。それが『徳島の盆踊り』。

で、彼が書いたのは1914年。で、彼が書いたのは、徳島は巡礼たちの集合地点である。全国から男性、女性、子ども来てます。中には美しい娘たちもいる。彼らは聖なる香りに包まれて、家に出たら（？）、そういう旅に出てることも書いたり、彼らは、巡礼の中には、主には宗教的、職業的なこじき遍路もいると言いました。あと、この服装の説明も、旅人のサンダル、わらじ履いたり、脚半とか、かなり、あと、杖も使ってる。

(問)

モートン で、彼が言ったのは、その当時は4カ月かかると、彼、モラエスが言っていました。で、すべてのものをリュックサックに入れて、白い着物を着て回る。で、信仰の旅が終わると、印（？）がいっぱいあった着物はとても高い価値、金になったり、そういうことを書きましたけど、モラエスが実際に遍路に出た証拠が一切ないです。で、面白いことに、モラエスが書いた『徳島の盆踊り』に四国での巡礼者、こういう写真があります、3人のお遍路さん。で、白黒なのでよく見えないので、それをちょっといろんなところで探して、もっときれいな写真あるかな？と思って、で、結局カラーがついてるものを見つけました。で、調べたら1880年代ぐらいの写真だとわかりました。そういう当時でも外国人が遍路の写真を撮ってます。で、モラエスが徳島に住んでる間に、別の外国人もよく遍路を見たり、論文に書いたり、写真も撮りました。それが1914年から20年の6年間、徳島にいたドイツ兵です。そのドイツ兵が青島、あとで写真出しますけど、日本人に捕まって、日本に連れてきて、大体4600人が捕虜、俘虜（ふりよ）になって、で、最初は日本の各地の公民館とかお寺でも収容されたんですけど、そのあとに、ちゃんとした収容所を作って。で、徳島の場合は板東収容所。ですから、1914年から17年、約3年間の間、徳島県庁のすぐ近くにある公民館にいました。で、そのあと17年から20年、戦争が18年に終わったんですけど、ほとんどの人が誰も帰国しなくなかったから収容所が20年まで続いた。で、そっちのほうも板東収容所にいました。で、地図で見ますと、中国の青島で捕まって、日本の各地域に、小さいんですけど12カ所ぐらい、松山、丸亀、大阪、名古屋。で、あとで、板東収容所が作りました。その板東収容所の地図は、入り口、正面、で、***があって、池が二つあって、料理をするところ。だけど、不思議になるのは、ドイツ兵が、この池でヨットクラブをしたり、ここでボウリング場を作ったり、ビールを作ったり、自分の***な新聞（？）を出したり。で、上の身分が高い上司が、この辺に別荘があって、もうかなり自由な生活を経験しました。で、この板東収容所、とてもユニークの収容所なので、12、3年前に、それについての映画、日本で作ってます。『バルトの楽園』、ラクじゃなくてガク。それについてのストーリー、ですから、もし時間があれば、ぜひそれを見て、もしそれを見る機会があれば、ぜひ、僕を探してください。

会場 (笑)

モートン (笑)、捕虜の役をしました。郵便局のシーンに出てきます。すごいいいお金いっぱいもらってる俳優さんの後ろ、エキストラとして映ってるから。

会場 (笑)

モートン (笑)、1週間の成果（？）でした。10秒ぐらい映ってます。という映画があります。で、その板東収容所が、1番札所、霊山寺と、2番札所、極楽寺のちょうど真ん中ぐらいなので、お遍路さ

んがその近く通ったので、よく見かけましたり、あとドイツ兵が1番札、2番に行って写真を、これは大師堂に行く階段の前の写真。そのドイツ兵、もっと面白いこと、霊山寺では11日間ぐらいで、博覧会、展示会をしました。その霊山寺の境内の中と、今、駐車場になってるんですけど、道の向こうに公民館の中で、ドイツ兵が作ったものを展示しました。なんとこの11日間の間で5万人、1918年ですよ。5万人が、子どもたちが並んでます。不思議なのは、どうして霊山寺の住職が、敵の人にどうしてこんな共感をあげたのか、すごく不思議。でも、とてもありがたいことです。そこでは、その展覧会の様子、これまた絵はがきなんです。で、もう一つの絵はがき、本堂の前、今こんな感じです。ドイツ兵が出版したニューズレターにもお遍路さんについてこのようなことを書きました。収容所の近く、坂東の道を通る多くのお遍路の姿が見れる。接待をうるおす(?)境内、お接待もあって、そこで、マメ、コメ、わらじ、手ぬぐいなど、お遍路さんに差し上げてる風習があると見ました。それがよく見えます。ドイツ兵が1番とか2番で行ったり(?)、新聞にこのような記事を書いたり、また100年前のお遍路さんの写真も撮ってます。その一つの例は、また真っ黒です。これとこういう、ドイツ兵が撮ったお遍路さんの写真。

(問)

モートン その坂東収容所にいた一人のドイツ兵の弟から見た遍路の話をちょっと話したいです。青島で捕まった一人のドイツ兵、ヘルマン・ボーナーさんが坂東収容所にいました。で、戦争が終わってドイツに帰りたくなかったので、神戸に移って40年間ぐらい大阪外国語大学でドイツ語の先生をしました。墓は神戸にあります。それで1921年頃にドイツにいる弟アルフレッドが、ヘルマンに手紙を出して、もう今ドイツの状況がとっても悪い、仕事がない、日本では何かないんですかとヘルマンに手紙を送って、で、ヘルマンが探して、松山でドイツ語の仕事を見つけてアルフレッドと彼女の妻が松山に来ました。ボーナー家、家系図(?)説明しますと、両親がいて、そこにヘルマン、坂東収容所、大阪外国語大学、ゴットロープ、アルフレッド、またその他10人子どもが13人います。で、その3人(?)、ヘルマン、ゴットロープとアルフレッドは、日本に住む経験あり、3人とも日本について本を書きました。で、ゴットロープとアルフレッドは、お遍路さんを観察したり、本にそういう記事を書きました。例えば、ゴットロープが3年間高知に住んでる間に、このような踏査(?)は巡礼に冷たいと聞いていたのに、実際に住んでみるとよそ者に決して冷たくない。とゴットロープが言ったし。またお遍路さんが、大きなすげ笠、杖、鈴、わらじ、で、八十八ヶ所を回る。また、彼らのためにオレンジ、ミカンを***お接待があると。不思議なこと、こっちが最初は、本屋さんで撮った写真です。ゴットロープはほんのちょっとしか説明しなかったので、今からアルフレッドのほうを説明したいです。アルフレッドが第1世界大戦中、捕虜になりました。そのあと、松山に来て6年間ドイツ語の先生をして、26年、妻、奥さんと、3歳の娘、写真です。が、先に帰りまして、その翌年27年、アルフレッドが夏に四国遍路をしまして、秋に東京でその旅について講演しました。で、28年にドイツに帰って、40年に四国遍路についての博士論文を出した。で、第2世界大戦、ドイツ陸軍の通訳になって、再び捕虜になった。本当に一番残念なのは、彼がずっと6年間集めてきた日本のもの、文献、掛け軸がアメリカ兵に取り上げられて返してくれなかった。どっかでまだあるかなと望んでいます。で、54年

に亡くなりました。これから、彼らのホッサ（？）唯一のものについて話したいです。それが、博士論文になった本です。1931年にその博士論文を本として出して、初めてのヨーロッパ人が、そういうお遍路さんとか四国遍路のことを説明しました。そこには八十八ヶ所の霊視、お寺の説明、お遍路さんがどういうものを使ってるのかとか、お接待などを説明しました。それが、70、80年ぐらいで、世界中の所々の図書館で眠っていました。本当に世界中でも10冊ぐらいしかなかった。それで、僕は、それを見つけて掘り出して、英語版とドイツ語版、再出版して、5、6年前、京都に住んでる佐藤先生が、その和訳版を出しました。でも、一つの注意なんですけど、アルフレッドが書いた本を見つけました。彼の親戚がまだ生きてるかな、ずっと思ってた、ある日、四国遍路に来たスイスの夫婦と会って、で、ボーナーさんの話して、その夫婦が、じゃあ、私たち、仕事、お遍路終わったら帰国して、ドイツのベンワ（？）町で、ボーナー家を探すから。えー。で、その夫婦は帰ってそのとおりました。ドイツの電話帳ですよ、ボーナー、何々何々、すべてに電話してくれたんですよ。で、ボーナー家は割と珍しい名字なので、20人ぐらいしかいなかった。その娘さんは、先ほど写真に出たんですけど、見つけて、その夫婦がスイスからドイツまで彼女に会いに行って、そのあと僕が、娘と13年間ぐらい手紙のやり取りしまして、彼女から、ほかの親戚から、そのアルフレッドについての情報を直接から聞きました。日本人の研究者がアルフレッドが書いた本をそのまま和訳した。ですから、アルフレッドについての情報が若干間違ってます。僕が書いた論文を、ぜひ読んでください。親戚から聞いた情報なので、所々、たまにそういう人が和訳版だけを見て、どっかの講演で発表してるんですけど、気をつけてください。アルフレッドも、お接待の風習をよく見たし、その当時、約1万人の人が肉体的、精神的に魂の大きな利益を得るといって、論文に書きました。またお接待は、キリスト教と同じような、キリストが教える言葉と同じ精神とも書いてありますし、あと四国遍路は三つの意義あります。それが、教育的な意義、経済的な意義、宗教的な意義。博士論文になってるので、ものすごく細かく深く説明してます。ものすごい昭和6年に外国人がこれほど研究したのは本当にすごいです。経済的には、その当時の旅費が30円。だから60円かかる、その当時、毎年3万人ぐらい来れば、回ったので、「30円」×「3万人」それぐらいの10万円が、その土地に落としたりと言ったり、そういうことを細かく書いてあります。娘の話に戻りますが、さっき説明した、最初の写真が彼女が3歳でしたけど、これ93歳で、おとし彼女の弟と僕の親戚がやっぱりアルフレッドが行った場所を見たいと思いがあって、おとし松山に来ました。その当時、弟が85ぐらいで、僕より身長が高くて、そういう出会いができて本当にうれしい。で、これ誕生日なんですけど、その数カ月後、ハナ（？）さんが亡くなって、そのボーナー家はアルフレッドが使ったものを、巡礼中で使ったものをモト（？）さんにもあげます、***、で、アルフレッド・ボーナーが使った納札***、アルフレッド・ボーナー、名前が書いてありますし、そこに40枚のお財布（？）***未使用が入ってました。もし徳島に来たら現物見せますので、今日持ってこなかったんですけど、それがありますし、あともう一つ不思議、とても貴重なものは、白衣ではなく、その経帷子もボーナー家を送っていただきました。大体130センチぐらい、上から下、で全部、1番から88番の種類があって、面白いのは霊山寺とか、雲辺寺とかこういうなぜだか、今見ないと思います。もう

一つ、貴重なのはアルフレッドが撮った写真。今から、ビフォアアフターの10枚ぐらいの写真を
見せたいです。1番札所、霊山寺。アルフレッドが昭和2年、1927年に撮った写真ですけど。極
楽寺、仏像はあるんですけど、木がなくなっています。4番札所、大日寺。

(間)

モートン ろうそく、線香、幡切寺、

(間)

モートン ***トウジ(?)、あと今日のために、だんだん。最後に善通寺のいくつかの古い絵はがきも
集めたのでそれも見せたあげます。昔の土俵(?)、あとこれがとても好きです。次は、2人が
寝てます、お遍路さん。***の頭、杖が。あと次は、この写真しかないです。日本人が撮った
ことないと思います。アルフレッド、この写真だけです。これがハンセン病のお遍路さん。メッ
セージ入れ(?)、出てる。

(間)

モートン じゃ、次、もう一人の外国人について話したいです。それがフレデリック・スタール、アメリカ
人でツカウ(?)。で、彼が、納札(おさめふだ)とか、納札(のうさつ)を集めるのが大好き
だったので、そのお札博士というニックネームだったんです。

(間)

モートン スタールさんが初来日のきっかけや、1904年、ルイジアナの博覧会の万博のために、なんとその
生きた展示品を、アイヌを数名アメリカに連れていった。スタールさんが人類研究者だったので、
それが初めてで。そのあと、15、6回ぐらいに来て、東京の病院で亡くなりました。お遍路さん
の姿ではないですけど、彼が富士山5回も登りましたので、富士山に行くときのものすごい長い
(?)、あとその巡礼、すげ笠などの写真です。スタールさんと四国遍路のかかわり、一番最初
の引用が1939年、タクモリイツエイ(?)が遍路と人生には、遍路にはいろいろな人が行ってる
外国人では、スタール博士とアルフレッド・ボーナーが、彼女が書いてます。先ほど、アルフレッ
ド・ボーナーの説明したんですけど、スタールの場合は、よく日本語で書いてある本には、53番
円明寺の説明見ます(?)。今日の宿題ね。円明寺のところ、ぜひ、見てください。そこには、
本によって違うんですけど、ある本には、このスタールさんが大正10年に来ました。別の本が、
スタールが大正13年に来ました。ある本にはスタールが一番古い銅板(?)を発見した、見つけ
た、もう本によって違うんです。で、違う本には高く評価した帰国に発表した。それを見て、ど
うしてそんなに違うの***。それでスタールについての研究を始めて、彼が本当にいつ来たの
か、この動画を本当に見たなのか、発見したのか。それで調べた結果、彼が2回四国遍路をし
ました。最初は、大正6年10日間だけ、瀬戸内海の半分ぐらいだけと、21日、大正10年2月と3
月の1カ月ぐらい。それが四国遍路の姿。17年のルートが岩国から広島、ずっと松山、石手寺、
西条、川之江、ドウイ(?)、海岸寺、善通寺に池田(?)徳島、小松島、神戸、とてもハイス
ピードでほぼ10日間ぐらい、そのルート。その4年後、神戸から徳島に来て、先に13から18番
をやって、そのあと1番から始まって、高知、宇和島、今治、西条、善通寺、高松、徳島、神戸
のルートを1カ月ぐらい済まして、とてもその道中、よくうちの街で、ぜひ、講演会をしてくだ

さいという依頼があったので、毎回 100 人から 1000 人、しかし、彼が日本語を全くできなかった。どうして彼がそんなに遍路を、こんな 100 年前、好き、する動機は、日本人、とても好きな日本人の 4 人に 1 人が弘法大師。どうしても弘法大師が残された足跡を行ってみたいと、あとに四国、そのままの研究を理解したいということです。それで、スタールについての資料はどこにあるかなど不思議に思って、調べたら、アメリカのあちこちの図書館にあります。それは、アメリカ議会図書館に彼が使った納経帳もあります。そこに大正 10 年 2 月 19 日、フレドリック・スタールで、あと彼の納札、面白いことには手書きではない。下 (?) にある、京都には、東京にあるお寺の名前が書いてあるので、その東京のお寺がこれを用意 (?) したと思います。ですから、これを見てわかったのが、スタールが大正 13 年に来てません。本当は大正 10 年の 3 月。それがいつの間にか日本人の研究者が 10 年の 3 月を 13 年にした。13 年は間違い、不快な文 (?)、10 年の 3 月です。で、実際に彼が発見してません。見せてもらっただけ、という、ぜひ、見てください。で、また今日のために彼の納経帳を見てたら、大体、善通寺、範囲 (?) ですね。本人がわかるように、本人が善通寺***。またスタールの日記を見ますと、面白いことが聞こえます。例えば、極楽寺に立ち寄ったとき、これが 1909 年の写真で、あとこれも本堂、さっきのドイツ兵がその下で立ってた。あと別の写真、これもボーナーさんが撮った写真で、今、お遍路さんがここに来たという安全 (?) ***、今、ここ、抱き地蔵ありますけど、昔なかった。で、スタールが極楽寺に行ったときに、英語で出てきますけど、スタールが言ったのは、奇跡的に病気が治った人たちが残した松葉杖があります、極楽寺に。これが、大窪寺 (?) なんですけど、似たようなおんなじような風景があったのではないのでしょうか、100 年前。ですから、極楽寺でも、大窪寺でも、そういう松葉杖がいっぱい並んでる、がありましたけど、今はどうでしょうか。ないね、どうしてでしょう。スタールさんが続けて、次は、地蔵寺で五百羅漢、これまた 100 年前ぐらいの絵はがき。で、その五百羅漢が大正 4 年で火事でなくなって、大正 11 年に再現したので、スタールが 21 年に行ったときは、もうそのあとしかなかったという引用があります。あと彼が平等寺に行ったとき、これ 100 年前の絵はがきで、平等寺のタニグチさんとお話ししたら、面白いのは、例えば、極楽寺に行くと長命杉ありますよね、弘法大師が植えた。平等寺にもありました。弘法大師が植えた木で、書いてあるんですけど、この木は、ちっちちちちちち、切ってしまってもうないです。どうしてでしょう。誰も知らないね、これ。昔の平等寺の山門、入っていく橋。スタールがそこに行ったときに、平等寺、大正 10 年 2 月 26 日を書いたり、地元の皆さんとの記念写真を撮りました。それよりも一番すごいのは、スタールが新野町に行ったときに、平等寺に 1 泊したんですけど、1 泊して翌朝、地元のボーイスカウトグループが本堂の前で集まって、ぜひ、そのアメリカのボーイスカウトに友情関係を作りたいと。私は、こういう手紙を書きました。ぜひ、アメリカに帰るときに渡してくださいというちょっとした儀式で。ですから、もうこの当時でも、ぜひ、友情関係を作りたいという思いがあって、スタールが四国遍路を全部回って、ものすごく感動したので、八十八ヶ所霊場に、このようなお礼状を送りました。今、遍路を終わりました、生涯で最も面白い経験の一つになりました。皆さん、とっても親切に対して、とても感謝すると言ったり、私は一人の巡礼者として、まだ言語や人種においては外国人で仏教の信者でもご

ざいませぬ。遠い国から代表者である、そういう、この上ない(?) 親切に***され、とっても喜んで永久に忘れることができないということも大正10年に言ってます。その手紙の続きも、各お寺でごちそうになり深く思ってます。面白いことには、もし、金毘羅(?) に行くと、学芸課に行ったら、スタールが***ものが飾ってます。この特別に、ホスピタリティ、スタール、大正6年3月7日に、今でも飾ってます。また、スタールがタニマジ(?) に平和と国際友情のことを書いて、それが今、農協ショウ(?) の入ったら真上にあります。で、スタールさんが亡くなって、とても有名な人だったので、英字新聞とか日本の新聞でも取り上げて、彼の日本人の友達などがスタール博士の碑を建ててくださいました。それが御殿場にあります。89年に道路の整備でその石を移動しましたが、これが当時の石です。碑で、今でもあります。行ったらフレデリック・スタールがあつて、遺骨がその下にあります。この石の横にスタール記念保存カート(?)、スタールが使ってたものを全部そこに保管しましたが、現在はそれがなくなってます。もう一人の外国人が***ノエルさんで、彼が1週間ぐらい四国に来ました。このノエルさんが神戸から高松に入って、善通寺、琴平、高知、入野、中村、宇和島、大体1週間ぐらいの旅をしました。大体100年前ぐらいのチラシなんですけど、善通寺の五重塔。彼は高松から汽車乗って、高松から善通寺と琴平に来ました。このノエルさんも***英語知らないんですけど、このノエルさんが昭和11年に善通寺が四国八十八ヶ所の一つの霊場で***、このバスケットのような帽子を皆さんがかぶってる、***必要なものを背負ってる、3カ月以上かかる。宇和島に行ったときは、雪の中ではお遍路さんが歩いていることを観察しました。これが彼が書いた高松の港で、船を待ってるお遍路さんの写真です。また、ノエルさんが書いた本には、このような女性2人の写真があるんですけど、面白いなのは、ここ書いてあるんですけど、やっぱりその当時、女性が遍路に出ないと結婚する相手なかなか見つけれないと教えがあつたので、若い女性が行ってこい、ぜひ遍路をきなさいということあつたそうです。その1人の女性といえば高群逸枝。今日は彼女の話はしない。ここまでは主に外国人から見た四国遍路。次は面白いストーリーについて話したいです。特に19番、立江寺では面白いストーリーがたくさんあります。これが昔の地図で本堂の前の写真なんですけど、外国人が特に立江寺が好きなんですけど、最近いろんな外国人から、どうしてそんなことするの? っていうちょっとした苦情のメールがくるんですけど、今、ここどこに何かある。で、外国人がWhy? よくテレビに出てるWhy Japanese people? せっかくだからお寺なのに、どうしてここここに自動販売機を置くなんて、もうちょっと景観を考えて、自動販売機が***という、そういうメールがたまにきます。昔のチラシ。立江寺というと白鷺橋で、悪い人が渡るができない、またお京の話も有名。二つの本を見ますと、1884年とか1926年、似たようなイラストがあります。彼女がこうなって、住職が来て、ローブ(?) を着て、そのあとお京はどうなりましたか。立江寺の近くに住んだって、お京塚、昔はこんな感じ。汚い。数年前にそれをきれいにしました。そのローブ(?) と髪の毛は、昔は***あつて、昔は本堂にあつただろう。お京の話がとっても有名なんですけど、ほとんどの人が知らないのは鶴林寺でも似たような話があります。ちょっとそれはホテルの写真ですが、この鶴林寺の略縁起、1935年にこのようなイラストがあります。似てますね。ほとんど***。この話のローブ(?) は体を全体***

*ようですけど、残念ながらこういう話はいくらも知らない、伝わってない。ちょっとおいて、立江寺に戻ります。立江寺は20年間、さまざまな霊験記を出してます。それを読んでみると、一番びっくりした、100年前お遍路さんがこんなことしたの？本当にびっくりしたのは、字が小さくて、ちょっと読んでみてください。まあ、この辺で終わる(?)。そんな100年前でもお礼の気持ち、感謝の気持ちとしてお遍路さんが指を切って、お寺に奉納しましたという風習がありました。調べたら4カ所、こことこことこことここに指があった、本堂の前にあったことがわかってます。それがずっと気になって、何か写真ないかな、ないかな。で、ついに見つけた。いくぞ。いい？瓶に入ってます。これ***写真なんですけど、***黒くなってるやつが指です。ほとんど誰も知りませんね、この話。じゃあ、ちょっと飛ばしましょう。立江寺に戻りますけど、また立江寺のもう一つ面白いのが、善根会、立ち上がったこと。そこでお遍路さんのためにさまざまなお接待をしました。例えば事務所のほうで、***とか農協料が接待にする(?)、必要なものを提供したり、お茶のためのお湯(?)をしたことを、この100年前ぐらいしました。もう一つ、極楽寺、国分寺(?)、昔この病気が治った人が杖とか松葉杖を置いたという話も立江寺でもあります。その松葉杖、杖だけではなくて、お遍路さんが箱車とかいざりを使いました。現在、箱車、昔、100年前ぐらいお遍路さんが使ってた箱車が、残してる霊場は何カ所でしょうか。一番有名なのは平等寺、だいぶ前の写真で、この四十数年前の写真によると、まだこれとこれがついてました。杖とか松葉杖ありました。現在見るとないです、ついてない。平等寺が一つ。あとは44番、大宝寺。何とこれが本堂の横にも***、この話、ちょっと有名で本堂の前にちゃんときれいに置いています、***。あと、またほとんどの人が知らないんですけど、大窪寺にもあります。大窪寺はどこにあるんでしょう。これなんですけど、本堂正面に入って、階段上がって、***上にあります。これも***、車椅子のようなものです。で、文献見ますとこの1853年の本にもこういう箱車が写ってます。1928年の本には、その車で回る人がいたり、小学生がそれを引く、***手伝ったり。あるこの当時は、2人の子どもが母の車を引いて回ったと。***ばかり歩けるようになって、そのいざりは杖を40番に置いた。それもその箱車の古い写真ないかな、これがイラストなんですから、それでもなくて、実際の写真が探したい(?)。それも何と見つけて、1930年の本にこのような写真があります。面白いなのは、車掌は熊本の人、京都の人、朝鮮の人、岡山の人が守っていると(?)。実際にそれを使ったという証拠になります。次のテーマなんですけど、旅行、100年前ぐらい四国遍路のどのぐらいPRしたのかを説明したいです。1930年頃にさまざまな日本語で書いてあるガイドブックがありました。阿波一國参りとか、極楽寺の長命杉の前、その30年代でも新婚(?)のハイキングのキャッチフレーズを使ったり、観光の四国、そのときでももっと観光とかハイキングのような言葉を使いました。別の本見ますと、36年には四国の旅路には四国遍路全体の写真、地図があります。説明した、昭和11年に四国に来たノエルさんの本には、こういう2人の写真があって、下に若い女性が回らないと、結婚する相手見つけられないというイラストがあるんですけど、この四国の旅路の一番後ろにこれがあります。同じ人、同じモデルが英語のほうにも、日本語のほうにもこういう遍路のパムフレット冊子にも使っていました。もしかして、顔が見えないよ、ちょっと上げて、そのあとの写真かな。

ちょっと説明したんですけど、30年代、若い女性が出たほうがいいと。それに関するいくつかの
写真があります。これが徳島市入田町の5カ所参りの巡礼。***1930年3月31日、そういう
ことありまして、あとこういう***。あとこういう写真もあります。この30年代は、JTBがさ
まざまパンフレット、海外に作って、四国をぜひ来てくださいということをしたんですけど、そ
の英語で書いてあることを日本語にしますと、四国が***の形をしたロマンスの島、この島に
はさまざまな魅力がある。しかし彼は多くの長い間、海外からの旅人の注目を引かなかった。日
本を訪れるほとんどの外国人観光客は、みんながよく行くところではなく、あんまり一般に知ら
れていない興味あるところにいつも探し求めている。この視点から、四国は全国で最もふさわしい
観光地域であるといえるだろう。これ昭和11年にJTBがこんなことを世界に言ってます。それが
載ってるパンフレットは、こういう左が1936年、右が46年。こんな当時でのJTBが、やっぱり
四国といえばお遍路さん。それを表紙にしました。47年は四国遍路プラス鳴門渦潮を海外に宣伝
しました。とっってもちっさい薄い本なんですけど。またその頃、こういう研究会がありました。
宗教問題研究会が1930年代にありまして、そのグループがこの2冊の本、日蓮宗の紹介、真言宗
の紹介、この目次、条文(?)には年々海外からの観光客が増加しています。昭和11年。で、日
本のカルチャー、文化のガイドとしてこういうものを作りました。その本には一番最初に見せた
お父さんと息子の写真とか、24番札所の御詠歌の英訳、こっちも四国遍路のお坊さんの写真があ
る。まとめに入るんですけど、100年前の四国遍路の***どうでしたか。100年前でも外国人が
よく四国遍路の様子を見たし、四国遍路のお接待文化などを感激しました。ほとんど知られてい
ない、忘れられてる不思議なストーリー、面白いストーリー、指を切ったり怖いストーリーがた
くさんありますね。どうしてこういうストーリーを言わなくなったのか、またどうして昔のお遍
路が残したもの、箱車、松葉杖がなくなっているのでしょうか。1930年代のように、これからぜひ
四国遍路の興味深い歴史や文化などを常に世界に伝えてください。ご清聴ありがとうございます。

会場 (拍手)

モートン ちょっとだけパート2、善通寺に関する古い絵はがきを。

(間)

モートン 一番最初、これ古くないんですけど1958年頃と思います。パンフレットです。五重塔がよく写っ
てます。これから、約10枚ぐらいの古い絵はがきを拡大しました。初めて見る人かな。***。
これがすごく気になります***でしょ。

会場 (笑)

モートン あと、弘法大師の***。弘法大師だけでなく、うちの次男も善通寺の小児病院で生まれました。
僕、徳島に住んでるのにどうして善通寺で生まれたんでしょう。ちょっと家族の話します。次男
が10週間早く出るよって***、10週間早く出たいとうちの妻***わかんないけど。で、医
師さんが慌てて、どうしよう、どうしよう。で、徳島県内の未熟児とかICU、全部いっぱいだっ
たんですよ。どうしよう、どうしよう、電話して、電話して、唯一OKが出たのはここ。だから、
クリニックの院長と僕と妻が徳島から救急車、ピーポーピーポー、ここまで来た(?)。そうい
うご縁が善通寺と。はい、次いきます。***。僕の場合、人が入ってる写真がとっっても好き。

ほとんどの若い女の子が子ども、ちっちゃい妹、弟を背負ってる。次。これが人がたくさん渡ってるところ。次は誰もいない。でも昔、店があったことがわかります。今では***、あと善通寺 temple。どうしてその当時、わざわざ英語を入れたんでしょうね。もうちょっと新しい、次はカラーがついてる。また、弘法大師が生まれた場所。ここに***。***でちょっと説明した、1930年代の1枚のチラシ。善通寺案内、これが***。表が各建物の紹介があって、***。もう一つ、1939年のこういう本もあります。これが、これぐらいの大きさで、各建物の写真があります。仏像の写真も全部あります。***今日紹介したノエルさん、昭和11年に善通寺に来たときに、あるお寺の人が案内してくれました。でもその人はかなり年寄りで、上る力がなかったから、ノエルさんと1人のお友達と一緒に上まで行ったと書いてあります。スタールさんも上ったと言ってます、大正6年でも。これで終わります。

会場 (拍手)

(ご指定箇所終了 01:23:48)